



大人がときめく、生き方マガジン [シニア Navi 姉妹誌]

つなぐ通信 Vol.15 2016 Autumn

いいものを、つないでいく。

今、わたしたちがすべき大事なことは
先人たちが築き、受け継がれてきた“大切な原点”を拾いあげ
それを次の世代に伝えること。

「人・心・世代・命・文化」がつながることで、
みんなが元気になる。
[つなぐ通信] はそういう志と気概をもった人たちが集う、
大人のマガジンです。

contents

02 特集 北海道津別町

04 夢に挑む 森の中の支配人
NPO法人森のこだま代表 上野真司

06 父と息子の挑戦 オホーツクから世界へ!
山上木工

10 Vintage Café /インタビュー
大西重成 (イラストレーター・造形作家)

12 河本純吾さんの農業と家族
ものそと研究所と仲間たち

16 JAつべつ青年部/つべつに新しい風を起こす。
迫田牧場/つべつのブランド牛で勝負。

18 つべつに移住 つべつで活躍

20 おいしいコミュニケーションつべつ

22 愛林のまち津別町
子育て支援・森林教育・スポーツ合宿

23 連載エッセイ/西村玲子のつなぐ暮らし

24 青梅「ホットマン」タオル物語<第3回>

26 かんぽの宿めぐり/勝浦・潮来

28 ホームを訪ねて 29・30
[東京都青梅市] 成蹊園
[東京都小平市] 小平健成苑

36 「つなぐ通信」読者プレゼント

屈斜路湖にかかる津別峠の雲海

写真=大社 優子 文=成田 典子

つべつはタフでファンキー!!

人と森に魅せられて

北海道津別町

しかもイケメン・美女ぞろい。なんかカッコイイよ、津別町!

農業・牧畜業・林業に携わる人が多く、アートや音楽、イベントも盛ん。

なんかスゴイよ、津別町!

厳しさが人や自然を育む。

夏と冬の寒暖差60℃!

人間の数より動物が多いし、不思議な生物(?)のいる美術館もある。

人口は、東京23区よりも少し大きい716km²ほどに約5000人。

ラグビーなどのスポーツ合宿も盛ん。なにしろ芝が素晴らしい!

町の86%は森林というだけあり、自然の魅力と資源に恵まれ、

女満別から津別町までは車で30~40分。あつという間だ!

羽田空港から1時間45分で女満別空港に到着。うーん空気が違う!

ついにやってきた北海道!ここはオホーツク海にも近い「津別町」。

Hokkaido Tsubetsu-cyo
COOL JAPAN | ● | in Tsubetsu



一緒につないでいきましょう!

「つなぐ通信」の広告主となって頂ける
企業様を募集しています!

お問い合わせは「つなぐ通信」編集部まで
TEL 042-357-5197 FAX 042-357-5192

メール info@tsunagu-t.com

ホームページ www.tsunagu-t.com



8,000坪の敷地に14のハウスがあり「目、口、右手、左手」など体の部分の名前がつけられている。パワフルでユーモアに溢れ、子供もお年寄りもハッピーになるアート作品が増殖中。

人生最後のパラダイスづくりは故郷の津別に決定！

最初から故郷の津別でシゲチャンランドをやるうとしたのではなかったんです。40歳頃から立体制作の仕事もするようになり、どんどん作品が増え、東京の家も仕事場もいっぱい。なんとかしなければと思っていた時に、本屋でハワード・フィンスターの「パラダイス・ガーデン」に出会ったんです。彼はアメリカのジョージア州で牧師もしているフォークアーティストですが、広大な庭に自分の廃材アート作品の私設ミュージアムを一人で作っていました。「あつ、こんな手があったのか！」と思いました。「二種のデューパークにしてしまえばいいんだと。方々土地を探し、津別で格安で土地が

見つかったこともあり、じゃあ「人生最後のパラダイス作りはここで！」と決定。50歳の時です。8000坪の牧場跡地を改装・補修工事など4年間の準備期間を経て2001年にオープンしました。今でいうリノベーションですね。いや、オープン当時はミソクソですよ（爆笑）。「なんだ金取るのか！」「女郎の館か？」「油絵や風景画はないのか」とか。へへ、確かに無謀でしたよ。だって津別のような田舎では無用ですよ、こんなガラクタのようなミュージアム（笑）。東京では右肩上がりのバブル時代に仕事していたから、新しいことはなんでも受け入れられたけど、ここでは、入場料700円が「高い、シルバー料金にしろ」とか大変。世の中ってこうなんだと初めてわかりましたね。狭い

世界で生きてきたんです。都会に憧れて出て行っただけで青い鳥は自分の足元にいたねシゲチャンランドを始めて16年目になります。入場者数は年間1000人〜1500人でずっと変わっていないんです。しかしお客さんの質や層は随分変わってきました。海外の方も来るようになったし、障害者のギャラリーをやっている人、あるいは農業やりながら絵を描いているとか、家具を作っている人とか、ここを知って遠くから訪ねてくる。

若い人の価値観は相当変わりましたね。僕たちの時代は、一つのことを突き詰めて頑張った。けど今の若い人は、「仲間」とか「集まるところ」が欲しいみたいです

歳をとるのが面白いね、生きていくリアリテイが力になるんだよ。

イラストレーター・造形作家

大西重成

「シゲチャンランド」は70年代から

イラストレーターとして国内外で大活躍した、

シゲチャンこと大西重成さんの私設美術館。

津別の国道沿いに、突然手作りの

真っ赤な建物のテーマパークが現れます。

そこには大西さんの摩訶不思議な生物の

オブジェがなんと1000体以上も増殖中！

楽園づくりは死ぬまで続くのです。

写真：大社優子 文：成田典子



建物は大工さんの手も借りたが、妻のココさん（写真左）と大西さんの手作り。好き勝手にいじれるのが本当に楽しかったという。広大な敷地の草刈りや雪かきも運営も二人でやってきた。

ね。同じカルチャーを共有してワイワイやる。その世界でトップを目指すのではなく、仕事はそこそこで、家族や仲間を大切に。夫婦で協力しあって子育てをして家族を守っていくというスタンス。家族のあり方や子育てのあり方が二十数年でガラッと変わったんです。ある意味で健全なんですよ。働くことに一生懸命になりすぎた僕たちの方が、特殊だったのかもしれない。なにしろまだ戦後でしたからね（笑）、やらざるを得なかった。津別に来て20年ほど経ちますが、土地に対する愛着が増すし、暮らしてみると何が足りないかもわかってくるんです。素晴らしい自然財産を利用して若い人と一緒にまだまだできることもあるし、このまま死んでしまうのはもったいない

と思うようになった（笑）。自分がやってきたことを、次の世代につなぎたいようになってきたんです。食事ができたり、ライブやイベントなどで集う場所も欲しくなった。今の若い人がやっていることと同じなんです。それが町おこしにもつながっていくと思う。その一つが「Neo Folk」の活動です。津別の生活に密着したライフスタイルと、新たなものづくりの創造を目指したい。僕は都会に憧れて、東京、ニューヨークと色々転々としたけど「ダイヤモンドは足元にあった」んですね。青い鳥と同じですよ。今はね、歳をとっていくのが面白い（笑）。歯が抜けたり、髪が薄くなったたり、できていたことができなくなったり、若い時では考えられなかったことを一つ一つ面白がって確かめているんです。骨とか朽ちたもので作

Profile●1946年北海道網走郡津別町生まれ。津別高校卒業後、横浜に憧れ横浜郵便局に勤務するが3カ月で退職。20代半ばに渡米しSchool of Visual Arts(N.Y.)入学。帰国後東京を拠点にイラストレーションなどの制作活動を開始。78年、ADC賞受賞。ハービー・ハンコックや坂本龍一のレコードジャケット、モスバーガーの小冊子「モスモス」の表紙イラストなどを担当し、人気アーティストとなる。2001年、故郷の北海道津別町に「シゲチャンランド」を開設。多くのアーティストにリスペクトされている。

【シゲチャンランド】〒092-0361 北海道網走郡津別町字相生256 Tel.090-5222-8580 ※開館期間・休館日はネットでご確認ください。 <http://www9.plala.or.jp/wl-garden/shigechanland/>

PRESENT 大西重成さんデザインの「クマヤキ」トートバッグを3名様にプレゼント！ 応募方法は36ページをご覧ください。

品を制作しているのも、自分を見ているような気がするからかな。自分がやってきたこと、失ったもの、病氣や生死とちゃんと向き合っていたいからね。アートだけではなく、日々の大変なことも含めて、生きていくリアリテイが力になるんだよ。



「Neo Folk」の一環として、2015年から自然の精霊に扮する「相生原人祭（あいおいげんじんまつり）」がスタート。

写真提供：大西 重成

Vintage Café 14 Shigenari Onishi



河本農場の敷地内に自宅がある。2つ違いの弟の務さんとは背格好もよく似ている。奥さんの玲奈(れな)さん、長女の胡夏(こなつ)ちゃん、長男の彩太(あやた)くん、次女の胡依(こより)ちゃんの、楽しく賑やかな5人家族。

河本純吾さんの農業と家族 ものごとと研究所と仲間たち



ここ最近ですよ、みんなの「なんかやりたいね」の波動が
大きくうねり出してきたのは。
「今だと思う!」。このチャンス、絶対逃せないんです。

写真 大社 優子 文 成田 典子

ドイツのクラス社のトラクター。ドイツの農業技術展「アグリテクニカ」に行った時に出会い、しっかり検討して購入した。



河本農場
〒092-0362 北海道網走郡津別町布川93-1
Tel.0152-77-3100
<https://www.facebook.com/kawamoto.farm>

子ども×しぜん×ものづくり それぞれが自己実現できる農場

津別町を取材して、多くの方から名前が上がるのが河本純吾さん(35歳)。2年前までJAつべつ青年部の部長を務めていた、河本農場の代表です。10年前、津別に大勢戻ってきた農業後継者たちの一人。つべつ西洋軒(P20参照)を拠点に、Uターン組などの異業種の若手後継者で立ち上げた「つべつGROW」

(P16参照)のメンバーであり、地産地消や、津別の農作物のブランド化、イベントなどで町おこしを行ってきました。河本家は香川県から入植してきて約90年、5代に渡り農業を営んできました。現在は純吾さんと弟の務さんの2人3脚。かつて家は「長男が継ぎ弟は分家」が一般的でしたが、河本農場のように、兄弟一緒に経営するところも増えてきたようです。津別の個人農家としては比較的大きな規模で、純吾さん夫婦、務さん夫婦、両親の家族6人で70haを耕作。広い耕作地で生産効率のいい小麦や、でんぶん用のジャガイモなど「原料作物」が中心で、ドイツのクラス社の大型耕作機や、大型コンバインが颯爽と活躍しています。

純吾さんには「ものごとと研究所」の代表という、もう一つの顔があります。「子ども×しぜん×ものづくり」をテーマに3年前に立ち上げ、子どもたちのためのイベン

トを企画&開催。津別町では文化的なものを築こうとする機会が少ないため、こどものイベントだったら来てもらえるかもしれないという思惑もあったようです。「僕も奥さんも元は保育士、弟はデザイン学校を出ているものづくりのプロ。河本農場とは別に3人がそれぞれ活躍の場がある『自己実現』できる農場を目指したいね、というのがきっかけです。普段農業者以外の方との出会いが少ないので、新しい人とのつながりが欲しかった。新しい人脈からヒントを得てビジネスが生まれるかもしれないし、河本農場に何か返せるものもあるんじゃないかと思ったんです」

河本農場では毎年2校の修学旅行生を受け入れ、農業体験してもらおう「グリーンツーリズム」を行っています。消費者に近い野菜中心の本州の農業と違い、津別は小麦粉やでんぶん用のジャガイモなど、原料作物なので消費者との距離があります。もっと生活者に農業の

現場も知ってもらうための、「人を受け入れる農場」を目指したいというのも「ものごとと研究所」を作った理由の一つでした。アートや木育のワークショップ

7月10日(日)に、ものごとと研究所主催のイベント「ものごととふぉーらむ なつ」が開催されました。場所はかつての本岐保育所。純吾さんもお子さんも通った、思い出の詰まった保育所です。イベントには純吾さんの人柄に惹かれたり、ものごとと研究所の趣旨に賛同した人たちのワークショップ、フードコーナー、ショップなど20店ほどが参加しました。

今回の目玉イベントは「もりの語り屋」による絵本パフォーマンスです。芦別市出身の絵本パフォーマーの森下智崇さん(35歳)は、元中学や幼稚園の先生。幼稚園勤務時代、スキルアップのために絵本の読み聞かせを夜の札幌・狸小路で始めたところ、繁華街を徘徊していた家出人や暴走族の若者、ホステスさんなどが熱心に聞き入るようになりました。噂が口コミで広がり1000人も人が集まるようになったのです。

「当時、真冬は鼻水垂らしながらでした(笑)。そしたらお客さんが『カイロ買ってきたよ』とか、あつたかい飲み物をくれたり。ありがたいですね。まさかこんな風に人と



Communication
in Tsubetsu



つながっていくとは思いませんでした」
札幌での評判が広まり、あちこちから依頼も来るようになりました。現在は数少ないプロの絵本パフォーマー「もりやの語り屋」として活躍しています。大人も子どもも目を輝かせ、笑ったり、驚いたり、森下さんのお話にどんどん引き込まれていくのです。

30代と70代の開拓者同士の連携 チャレンジ精神と文化をつなぐ

アート性が高いワークショップもあります。「クラフトハットづくり」は、アメリカでも活動していた伊藤暢子さんの指導で、紙袋がアートな帽子に仕上がります。子どもと一緒に参加していたお父さんのほうが夢中になるくらい。「シルクスクリーン体験」も本格的です。

津別ならではの木育では、カッコウの鳴き声をする「ウッドホイッスルづくり」、アイヌ模様のことや彫刻刀の使い方も教えてくれる「アイヌ模様木彫り体験」、てしかが自然学校の「薪わり、たき火体験」。二つのワークショップが丁寧でレベルが高く、人口5000人あまりの津別町の質の高さに驚かされます。

フードやドリンクコーナーでは、自家製の牛肉ソーセージなどで知られる津別の川瀬牧場の「ぎゅぎゅ〜つとテラス」、自家焙煎珈琲を販売している

「幾島珈琲研究所」の幾島広樹さんは、コーヒー研究家の元校長先生として地元の有名人。

ひとときわ目立っていたのが、「でてこいランド」の元気な年配者たちです。「でてこいランド」は心身にハンディのある人のための施設として寄付で設立され、ボランティアさんで運営されています。津別の町議会議員も務める事務局長の山内彬さんは、設立に尽力した一人。純吾さんも「でてこいのジージたち」と、口は悪いのですが、リスペクトと愛はたっぷりです。「山内さんたちの世代（70代・60代）は、町づくりに頑張ってきました。しかし、そのあとの50代・40代がスコンと抜けているんです。そこまで頑張る必要がなかったのか、人が流出したのかもしれない。おそらく日本中同じだと思います。今僕たち30代が町を支えようと頑張っているんですが、そういう気持ちで山内さんたちにも伝わるようで、応援してくれる。すごく嬉しいですね」

小さな町だからできる 新しい農家の暮らしや町おこし

4年前に全農青年部の1分間CMのコンテストがあり、JAつづつ青年部が優勝しました。JA青年の歌「君と」をパンクロックにアレンジしてバンド演奏したもので、当時青年部部長だった純吾さんも



旧本岐保育所。

Monosoto Forum
<https://www.facebook.com/monosoto.labo/>

仲間が集い楽しみ創る ものごとふおーらむ

どしゃ降りの中、必死に流しそうめんを食べるこども、
こどもより夢中になっているお父さん、ここではみんなが自然児になれる！



「ぎゅぎゅ〜つとテラス」のカッコウイイ。

絵本パフォーマーの森下智崇さん。



1.2.薪割りや綱渡りにこどもたちも「ドヤ顔」。3.河本農場と同じクラス社のトラクター。4.雨の中必死の形相で流しそうめんを食べるこどもには、雨もまた楽しい！5.フットワークがよく面倒見のいい津別新報社の相澤真由美さん。6.7.「ぎゅぎゅ〜つとテラス」の川瀬保子さん(右)と、「びーと畑」の木島智美さん(左)。



PRESENT
「幾島珈琲研究所」の
コーヒー豆を2名様にプレゼント！
応募方法は36ページをご覧ください。
(写真は幾島広樹さん)



「でてこいランド」のスタッフさん。

8.「ふしぎや」の駒田利樹さんの「ウッドホイッスルづくり」。9.冷めても美味しい、大人気のでてこいランドの焼き鳥。10.事務局長の山内 彬さん。11.いつもお世話になっているでてこいランドのみなさん。12.13.「near」は農家をしながら美幌町でオープンしているおしゃれな雑貨ショップ。14.東本翔雲さんの「ふであそび」のワークショップ。15.伊藤暢子さんの「クラフトハットづくり」は、こどもも大人も夢中！はぎれや木の実、麦の穂など、いろんな素材を組み合わせて創るおしゃれなハットは、誰でもアーティストになった気分！

ものごと研究所 Tel.090-6993-9837
<https://www.facebook.com/monosoto.labo/>



「でてこいランド」のスタッフさん。



バリアフリーの交流の場

北海道でこいランド

きっかけは「長崎でこいランド」との出会いでした。心身にハンディキャップを持つこどもに、家庭や施設に閉じこもっていないで「でてこい！」と呼びかけ、「ふれあいの場」を、親や支援者たちが力を出し合って作りました。「同じものを津別にも作りたい！」と、1992年に地元有志による建設実行委員会を設立。津別はもとより全国を奔走して1口1万円の寄付をお願いし、1996年に心身にハンディのある人も、こどもからお年寄りまで気軽に集まれる、バリアフリーの「宿泊交流施設」としてオープン。トータルで2000万

円を超える資金が集まりました。現在は「NPO法人北海道でこいランド」として、格安な宿泊費で、障害者や青少年の修学旅行やスポーツ合宿にも利用されています。

宿泊費は中学生以上¥2,000、小学生¥1,500と格安(冬季はプラス¥500)。予約で食事もお出せるし自炊もOK。取材時はボランティアスタッフがイベントのための料理の準備中。



建物や内装は地元の木材で作った。壁面は地元企業のカラマツの合板。



NPO法人 北海道でこいランド
〒092-0225
北海道網走郡津別町
字共和24-1
Tel.0152-76-1313